

② 第7次発掘調査において、S K60土壌から出土した共伴資料である。本調査は外郭南門の北北西約10mのところにある約 $2 \times 2 \times 0.15$ m程の不整形の土壌である。覆土中木簡共伴土器から嘉祥2年(849)の年紀をもつ木簡と木器、植物種子および土師器・須恵器が出土した。9世紀中葉の資料である。

SK60の土器 (2) S K60出土土器 (第60図)

土師器 杯(405)はロクロ成形で、底面の切り離しは回転糸切りである。回転糸切り後、体部外面から下端にかけて回転ヘラケズリの調整を施している。高径指数41.3、口径9.3cm、外傾度28°。甕(409・410)はロクロ成形である。

須恵器 杯(406)はロクロ成形で、底面の切り離しは回転ヘラ切りと思われ、無調整である。高径指数22.8、口径12.7cm、外傾度35°。杯(408)はロクロ成形で、底面の切り離しは回転糸切り、無調整である。高径指数36.7、口径12.8cm、外傾度32°。

③ 第54次発掘調査において、S X671基礎地業中から出土した共伴資料である。S X671はS F650とS X670間の埋め立て事業で、S X671地業とS F650地業間に時間差は認められず、創建時の連続作業である。したがって、S X671の年代は弘田柵跡創建期にあたる。この短頸壺の製作年代は8世紀中葉と思われ、遺構年代とは異なるかもしれない。

SX671の土器 (3) S X671出土土器 (第60図)

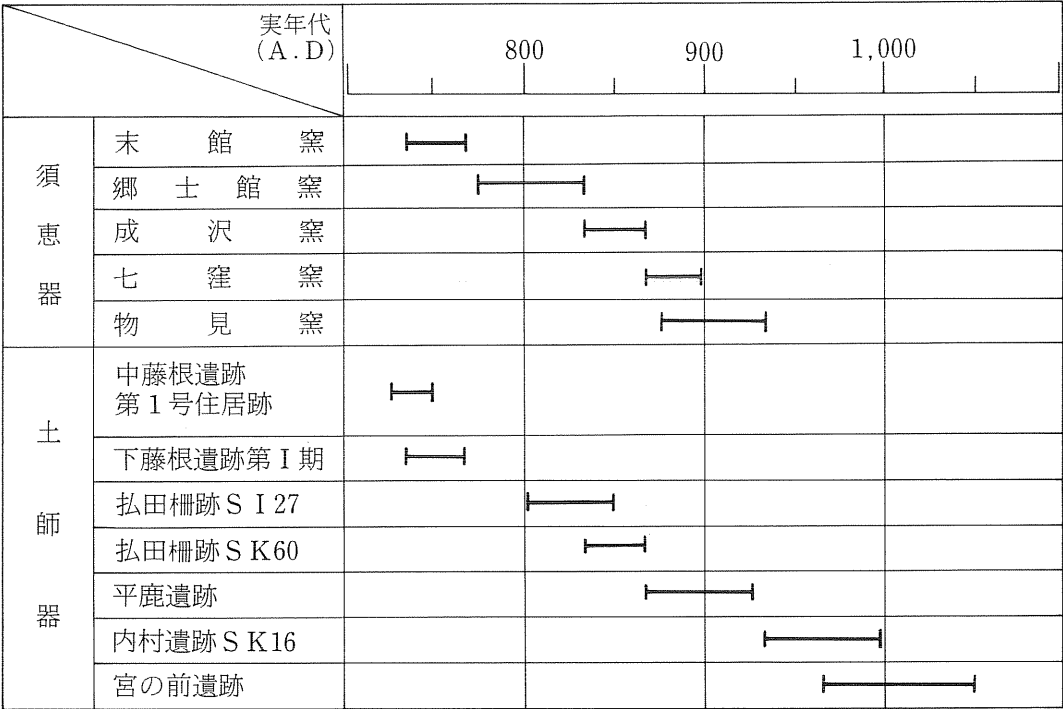
須恵器 短頸壺(411)はロクロ成形で体部下半に回転ヘラケズリ調整がある。底部には砂が付着し、砂底である。

4 横手盆地における須恵器・土師器の編年

横手盆地における須恵器窯と集落出土の土師器一括土器を取り上げ、該期の特徴と年代についてふれてきた。また、弘田柵跡の政庁域外から出土した遺構と共伴した土器についても紹介した。これらの資料から、相対編年を作成し、年代を与えると第19表のとおりとなる。

須恵器窯操業段階は第I期『末館窯土器段階』、第II期『郷土館窯土器段階』、第III期『物見窯土器段階』の3段階に大別され、将来細分化が可能である。また、操業の開始は8世紀中葉であり、10世紀中葉にはなくなってしまうようである。

土師器は遺構出土の共伴を精選して、おおよその年代をあてはめてみた。土師器としてある土器群については、出現時期・組成・焼成施設・終末年代など未解決な課題が多く、



第19表 須恵器・土師器編年表

器種 層序	土 師 器		内黒土師器		須 恵 器		計	
		(%)		(%)		(%)		(%)
I	38	93	0	0	3	7	41	100
II	458	88	8	1	57	11	523	100
II'	276	77	9	3	72	20	357	100
III	63	62	3	3	36	35	102	100
IV	82	41	13	6	106	53	201	100
計	917	75	33	3	274	22	1,224	100

第20表 杯底部の器種別出現率

型式学的な細別も今後の課題であるが、近い将来解決されるであろう。

横手盆地においては、9世紀後葉から、土師器が急激に増加する傾向がある。払田柵跡第10次発掘調査において、土師器・内黒土師器・須恵器杯底部の出現率の統計をとったものがある。第20表では、土師器と須恵器の出現率の反比例の関係が明瞭である。この傾向は秋田城跡第17次発掘調査においても

土師器と須恵器の出現率

確認されていることである。土師器と須恵器のこの逆転現象は9世紀後葉から顕著にみられるようであり、須恵器窯の衰退と連動した現象とみることができよう。

5 各遺構期の年代

さきに政庁各遺構期の建物配置について検討した。次に横手盆地における須恵器・土師器の編年について素案をつくってみた。ここでは各遺構期に属する遺構から出土した主要な土器の編年位置について検討し、各遺構期の存続年代について把握することにする。